大原社会問題研究所と増島宏先生

五十嵐　仁（法政大学大原社会問題研究所教授）

「ブログ　五十嵐仁の転成仁語」―掲載２０１１年12月13日（火）」

〔以下の論攷は、12月10日（土）に法政大学市ヶ谷キャンパスで開かれた増島先生を語る会で代読していただいたものです。会には70人余の方が参加され、盛会だったそうです。〕

本来であれば、出席してお話し申し上げるべきところですが、よんどころない所要のために欠席せざるを得ません。文書にて発言することを、お許し願いたいと思います。

増島先生は、私自身にとりましても大学院時代にお世話になった恩師のお1人でした。授業での指導を受けただけでなく、ゼミ生を中心に政治史研究会を主宰され、私も参加させていただいたからです。

当時、先生は法政大学の常務理事をされていて、大変、多忙でした。それでも、研究会には良く顔を出されていたように思います。

当初、中林賢二郎先生のゼミで労働運動史や統一戦線論の勉強をしていた私が次第に政治学や現代日本政治研究の方向に傾斜し、労働政治を専攻するようになったのは、この研究会での影響が大きかったように思います。

私が初めて単行本に原稿を書いたのは、増島宏・高橋彦博編『現代日本の議会と政党』でした。この本は１９８０年5月に出ていますので、私が29歳の時です。記念すべきデビュー作ということになりますが、それが可能だったのは増島先生のお陰でした。

また、翌年の81年12月には、中野好夫・長崎肇・諏訪弘・陸井三郎・小谷崇・熊倉啓安・高橋彦博という錚々たる方々と共に『危局を読む』という本にも一文を書かせていただきました。これは研究会で指導を受けていた高橋彦博先生の勧めによるものです。

このように、増島先生との出会いはその後の私の研究者生活を大きく左右するものでした。増島・高橋両先生との出会いとご指導がなければ、現代日本政治に対する私の関心や研究が、

このような形で進展することはなかったでしょう。

労働問題だけでなく政治研究をも志すようになり、それなりの成果を上げることができたのは政治史研究会のお陰でした。この点で、増島先生の学恩を忘れることはできません。

そればかりではなく、増島先生は法政大学の理事としても、研究所の良き理解者としても、大原社会問題研究所に対して常に大きなご支援と励ましをお寄せ下さいました。また、大原社会問題研究所の研究プロジェクトにもご協力下さり、戦前の無産政党関連の資料整理や無産政党の研究に携わられ、戦後占領期の雑誌などの復刻事業にも力を貸してくださりました。

最近では、「戦後社会運動史研究会」に加わっていただき、大変、お世話になりました。この研究会が発足したのは２００２年のことでしたが、このときから増島先生は参加され、２００７年に刊行された研究所叢書『「戦後革新勢力」の源流』に、「序章　占領前期政治・社会運動の歴史的意義」を執筆されています。

この研究所叢書の続編として今年3月に出たのが、『「戦後革新勢力」の奔流』でした。この本が刊行されてからしばらくして、先生は「桜を見にきた」と仰って、ぶらりと研究所に現れたのです。そして、「叢書に書かなかったから、せめて書評でもしたい」と申し出られました。

こうして、増島先生は叢書の合評会でのご報告を買って出られ、ご報告されました。それが

終わってから自宅に戻られた先生は「疲れた」と仰り、その後、体調を崩して入院され、帰らぬ人となられました。研究会でのご報告が負担となったのかもしれません。

合評会が原因で体調を崩されたとすれば、先生の健康状態を過信し、ご高齢であることを十分考慮に入れず、配慮を怠った責めは私にあります。責任を痛感しており、慚愧に堪えません。

ただ、先生は倒れられる直前まで、現役の研究者として合評会でのご報告を担当されました。生涯現役を貫かれた先生は立派であったと思います。

合評会では、これからの研究課題や意欲も大いに語られていました。その課題を受け継ぐとの決意と共に、今はただ、増島先生のご冥福を心からお祈り申し上げるばかりです。

（当時　法政大学大原社会問題研究所所長）

◇現代労働組合研究会のＨＰへ（ＴＯＰ）
http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/111210roudou-index.htm